等　高　線

後藤　隆徳

断煙20年

煙草の煙が嫌いである。いや、嫌いになった、と言うべきであろうか。どうしても好きになれない。山などかなり遠くで吸っていても、すぐ嗅ぎ分けるくらい敏感になった。

実は今から 20 年前は吸っていた。だが、結婚を契機にスッパリ止め、爾来（じらい）、1 本も吸っていない。

当時、母は、私の山の写真を見て「隆徳は休憩の時、必ず煙草を吸っている」と言ったものだ。その位吸っていたのだろうか。

何度も止めようと思った。しかし、幾度かの「断煙」（禁煙という表現は適当でない。「禁煙」は公共の場所等で禁ずること。自分自身のことは「断煙」である。断食、断念、断絶と同じ）はうまくいかなかった。結婚はいい機会だった。共働きで不用心だし、生まれてくるであろう子供の為が最大の理由だった。

丁度その頃、日本で初めて「嫌煙権」なる言葉が生まれた。当時としては革新的な思想だった。非喫煙者の「吸わない権利」を主張するものだった。あれから 20 年、まだまだ十分とは言えないが、ようやく「嫌煙」「分煙」「隔煙」と非喫煙者の市民権は確立されてきた。そして全国規模の「嫌煙権を守る会」が出来るにあたって、私も入会し、例の子供の顔をモチーフした（知っている人はいるかな？）バッチを胸に付けて悦に入っていた。

ところが、長年の煙草の影響は実に大きかった。

何度か、「吸ってしまった」夢をちょくちょく、1 年間見た。「あ～約束を破ってしまった」と思うと、夢などである。だが、それも 1 年後にはピッタリとなくなった。

だから、私は友達の「断煙」の判定基準を 1 年間としている。1 年止めれば正に本物である。

■

最近は女性、若年層の喫煙が多いと聞く。先日ガッカリしたのは、私が勤務する会社で今年の高卒入社者の 20 名位がほとんど喫煙していることだった。昼食を終え、人目もはばからずスパスパやっている。

会社も会社だ。なぜ入社の際、きちっと止めさせないのか不可解である。身体に悪影響の上、仕事の能率は落ちる。法にも反しているのを黙認するのでなく、入社の条件として「断煙」させるのが、社会的な企業としての務めではないだろうか。

若年層の喫煙が増えた背景の一つにファッションがある。子供の頃からテレビ、雑誌で喫煙が、さも爽快で心身をリフレッシュさせ、身体に特に悪くないような印象を与える宣伝が溢れる。

また街頭、店舗には、これでもかというくらい自動販売機が氾濫し、小学生でも自由に購買できるのが「豊かな日本」なのだ。

年に１回の清掃登山で、いつも一番目につくのは「煙草のフィルター」だ。あれはプラスチックなので長い間「残留」する。

それを知っている喫煙登山者は少ない。山の清浄な大気を汚染させ、大地を汚し「山はいい」とほざく。せめて、全ての登山者は即刻「断煙」すべきである。

【№36　97.04.19】